

カフカの『ある犬の探究』

—歌う犬とミレナ—

佐々木 博 康

Kafkas *Forschungen eines Hundes*

— der singende Hund und Milena —

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第37巻第1号

2015年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 37, No. 1, April 2015

OITA, JAPAN

カフカの『ある犬の探究』

—歌う犬とミレナ—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿は、1922年に執筆されたカフカの未完の短編『ある犬の探究』の末尾に登場する狩人犬を、カフカと一時恋愛関係にあったミレナ・イエセンスカの形象化であるとみなし、伝記的事実を参考にしつつ、「未知の糧」を求める探究犬と歌を歌う狩人犬の不可思議な対話の意味を明らかにするものである。探究犬と狩人犬の対話はカフカとミレナの恋愛関係を凝縮して表現したものであり、そこで暗示的に議論されているのは、愛と性をめぐる問題である。性行為に否定的な考えを持つカフカは、愛と性が一体であることを当然視するミレナと言い争う中で、彼女の愛を感じとる。狩人犬の歌が示しているのはミレナの愛なのであり、それはカフカが求め続けていた「未知の糧」だったのである。

【キーワード】 音楽 ミレナ 未知の糧 狩り

はじめに

カフカの『ある犬の探究』（以下、『探究』）は、1922年9月18日過ぎから10月の終わりごろまでに書かれた未完の短編である。短編としてはかなり長いものである。一人称の語り手の犬（以下、探究犬）が、自分のこれまでの人生を振り返る話で、人間はまったく登場しない。あらすじは以下のとおりである。

少年の日の探究犬に決定的な影響を与えたのは、7匹の音楽犬との遭遇である。彼らは突然暗がりから現れ、魔法のように音楽を浮かび上がらせる。探究犬は音楽に圧倒されるが、彼らは再び闇に姿を消す。彼らとの出会い以後、探究犬は、犬族が何を食べて生きているのかを研究し始める。犬族は大地から食物を得ているのであるが、探究犬はそれらの大半が空から降りてきたものであることに気づく。探究犬は空から降りてくる食物が地面ではなく自分の方に向かってくるのではないかと考え、食物をわざと食べない実験、つまり自発的な断食を行う。他の犬たちから離れ、探究犬は茂みの中で食物が現れるのを待つ。自分の実験が成功し、世間から高く評価されることを期待するが、何も現れない。長い断

平成26年10月31日受理

*ささき・ひろやす 大分大学教育福祉科学部情報国際教育講座（ドイツ文学）

食の果て、最後の希望が消えうせたという絶望感に満たされ、ついには血を吐いて気を失ってしまう。気がつくと、目の前に一匹の見知らぬ犬がいる。その犬は探究犬に、狩りの邪魔になるので立ち退くよう求める。動けないので放っておいてくれと言う探究犬との間に押し問答が行われる。やがて探究犬は、相手の犬が自分でも気づかないうちに歌を歌い始めていることに気づく。探究犬の五体に力がみなぎり、走ることができるようになる。その後、探究犬は犬族の音楽を研究するようになる。

人間のありようを犬の姿によって譬えた寓話的な物語であるらしいことはわかるが、イソップの寓話のように人間世界の事柄の動物世界への単純な置き換えとはなっていないので、内容を理解するのはきわめて困難である。ただ、物語全体がカフカの人生をなぞっていること、語り手の犬がカフカの分身であることはすぐに見て取れる。

たとえば、物語は語り手の犬の世界に対する異和感から始まっているが、これはカフカが始終感じていたことであり、その文学の中心テーマでもある。また音楽犬たちとの出会いは、カフカが28歳のときにプラハを訪れた東ユダヤのイディッシュ語劇団の人々との出会いを描いていると考えられている。カフカは、西欧に同化してしまった自分たち西ユダヤ人とは異なり、ユダヤ的なものを身にそなえた東ユダヤ人の一座に感激し、彼らを援助するために奔走している。さらに語り手の犬は空からの食物を求めて断食するが、これは「未知の糧」¹⁾を求めた『変身』のグレゴールや『断食芸人』の断食芸人と同様の行動であり、肉食主義を試み、また性的な意味での禁欲を自らに課したカフカ自身の生活と通じるものである。そして断食の果てに探究犬が血を吐くことは、カフカが結核による咯血に見舞われたことに符合する。

以上のように、この物語の主要部分がカフカの実人生と関連している。カフカは犬に化身することで、寓話の形で自分の人生を振り返っているのである。では物語の最後に登場する歌を歌う犬は、カフカの人生のどのような出来事と関連しているのだろうか。

ハルトムート・ビンダーは、歌う犬のモデルはミレナ・イエセンズカーであると指摘している²⁾。カフカがこの物語を書く数年前に出会い、関わり、やがて別れることになった女性である。ただ、ビンダーは伝記的事実と関連していると考えられる箇所注をつけているだけで、探究犬と歌う犬の出会いの意味を解き明かしているわけではない。ビンダー以外の他の研究者となると、この場面をミレナとの関連で論じている者は筆者の知る限り皆無である。

本稿では、探究犬と歌う犬の場面がカフカとミレナの恋愛関係を寓話的に表現したものであるという仮説の下に、この箇所を読み解いていく。以下、探究犬が歌う犬と関わる場面をすべて順に引用し、注釈をつける形でその意味を明らかにしていく。

1. 「一匹の美しい犬が」——出会い

断食の果てに血を吐いて気絶し、死に瀕している探究犬の前に、「一匹の見知らぬ犬」が現れる。

しかし、神経質な犬が思うほどさっさと死なないものだ。私は気絶しただけで、目を覚まして見上げたとき、一匹の見知らぬ犬が私の前に立っていた。私は空腹を感じなかった。とても力にあふれていた。四肢がはずむように思われた。もっとも身を起こしてみるこ

で試してみることはなかったが。私は別にふだんよりも多くのものを見たわけではなかった。一匹の美しい、しかしきわだってというわけでもない犬が、私の前に立っていた。それが私にわかった。それだけのことだったが、私はふだん以上にその犬には見るべきものがあると思った。私の下には血があった。最初私は、それは食べ物だと思った。しかしすぐに、私が吐き出した血だと気づいた。私は目をそむけ、見知らぬ犬の方を向いた。犬はやせており、脚が長く、褐色で、あちこちに白いぶちがあった。美しい、強い、探究するようなまなざしをしていた。³⁾

ここに登場する犬こそ、ミレナである⁴⁾。この犬は探究犬が血を吐いて倒れたところに突然姿を現すが、このことは、カフカが肺結核で咯血し、静養しているときにミレナとの関係が始まったという伝記的事実と相応する。

二人の関係が深まりつつあった 1920 年 6 月、カフカはミレナ宛の手紙で、二人の出会いの状況について次のように書いている。

死の床の汚物と悪臭にまみれて死の床に横たわっていると、死の天使が、それもあらゆる天使のうちでももっとも至福に満ちた天使がやってきて彼を見つめる。この男にはそもそも死ぬことが許されているのでしょうか。(1920 年 6 月 10 日付, Mi 49f.⁵⁾)

「汚物と悪臭にまみれて」いるのがカフカであり、また「天使」とされているのがミレナであることは、彼女への別の手紙から明らかである⁶⁾。最後の一文は修辞疑問文であって、とても死ぬことなど許されないと断言している。

また、ミレナとの関係が終わりに近づいた頃にカフカが二人のこれまでの関係を総括的にまとめた手紙の文面も同工異曲である。

森の獣である僕は、当時ほとんど森の中におらず、どこか汚い穴（汚いのは僕がいるせいだ、もちろん）の中に横たわっていた。そのとき僕は野外にいる君を見た。僕がこれまで見たうちでももっとも素晴らしい存在。僕はすべてを忘れた。完全に我を忘れた。(1920 年 9 月 14 日付, Mi 262)

9 月に書かれたこの手紙では、恋愛が始まったばかりの 6 月の手紙とは打って変わって暗い調子になっている。カフカは自分を「汚い穴」にいる「森の獣」になぞらえる一方、ミレナを「もっとも素晴らしい存在」としている。

「汚物と悪臭」の中に横たわる男が「天使」を見上げる、あるいは「汚い穴」にいる「森の獣」が野外にいる「素晴らしい存在」を見上げるという構図は、自分が吐いた血にまみれながら美しい犬を見上げるという『探究』のそれと一致している。

物語の引用の終わりで、見知らぬ犬が「美しい、強い、探究するようなまなざしをしていた」と述べられている。ミレナの女友だだったマルガレーテ・ブーバー＝ノイマンは、彼女について、「その（＝ミレナの）強い、青い、つらぬくような目に人は捕らえられた」⁷⁾と回想している。「強い」という形容詞が共通しているし、「探究するようなまなざし」と「つらぬくような目」という描写も視線の鋭さを捉えている点で一致している⁸⁾。

2. 「ここを立ち退いてください」——恋愛の始まり

見知らぬ犬は探究犬に話しかけてくる。

「ここで何をしてるんですか」と犬は言った、「ここを立ち退いてください。」「今は動けないんです」と私はそれ以上の説明をはぶいて言った。というのも、この犬にすべてを説明する必要などなかったからだ。それにその犬のほうも急いでいるように見えた。「どうか、ここを離れて下さい」と犬は言って、そわそわとしてそれぞれの脚を交互に上げたり下ろしたりした。「ほっといて下さい」と私は言った、「私のことなどかまわないで下さい。他の犬たちも私のことはかまわないのです。」「あなたのためにお願いしているのです」と犬は言った。「どのような理由で頼んでおられるにせよ」と私は言った、「歩きたくても歩けないのです。」「だいじょうぶですよ」と犬は微笑みながら言った。「歩けます。とても弱っていらっしやるように見えるからこそ、私はあなたにお願いしているのです。今のうちにゆっくりと立ち去るようにと。ためらっていると、今度は走らなければならなくなりますよ。」「そんなことは私が心配します」と私は言った。「それは私の心配でもあるのです」と犬は、私の頑固さを悲しみながら言った。

犬は、探究犬にうずくまっている場所を立ち退くよう求める。一方、探究犬は、もう歩けないのだと言って、自分に関わってくる犬を斥けようとする。見知らぬ犬が立ち退きを要求するのは、その犬が狩人であり、その場にいと狩りの邪魔になるからであることが後でわかる。

探究犬と美しい犬の関わりをカフカとミレナの恋愛関係とみると、ここには何が表現されているのだろうか。それは二人の恋愛の始まりである。だが恋愛の開始がロマンチックなシーンとはならず、なぜくどけ、どかない>のやりとりになるのだろうか。これではまるで言い争いである。

このことは、ここでの会話がカフカとミレナの実際の対話を単純に寓話化したものではなく、ミレナの登場によってカフカ自身の内部に生じた不安を表現したものであると考えると理解しやすくなる。探究犬が断食を実践している森の茂みを離れるということは、カフカにとってはそれまで自分が続けてきた禁欲生活を放棄することを意味する。つまりミレナの接近によってカフカは、自分のこれまでの生活を捨て去るよう求められたと感じたのである。

たとえば、ミレナから好意を示された直後、カフカは次のように逡巡を表明している。

ミレナさん、どうか考えてみて下さい。どうやって私があなたのところに到達したのかを、私がどのような 38 年の旅をしてきたのかを (.....)。曲がり角の一つで、偶然のように、これまでまったく思ってもみなかったのに、こんな年になった今になってようやく、あなたと出会ったにしても、ミレナさん、私は叫ぶことなどできません。叫ぶべきものは私の中には何もないのです。(1920 年 6 月 3 日付, Mi 41)

「叫ぶ」とは、喜びのあまり叫ぶことである。ミレナの愛にそれにふさわしい言葉で反応することである。カフカはここで、自分の年齢を口実にして——後述のように実際には年齢が問

題ではない——、もはや若者のように大仰に反応することはできないのだと弁解している。

ミレナに強く惹かれつつも、彼女の接近を自分の現在の生活に対する一種のおびやかしと感じたカフカの心の内部の葛藤が、ここでの＜どけ、どかない＞のやりとりとなっているのである。

対話の中で探究犬は、「私のことなどかまわないで下さい。他の犬たちも私のことはかまわないのです」と述べている。この意固地とも感じられる発言は、世間から孤立して生きてきたカフカ自身の思いを誇張して表現しているだろう。また、「歩きたくても歩けないのです」という言葉には、肺結核による肉体的衰弱ばかりでなく、「私は叫ぶことなどできません」という上の手紙に見られるようなカフカの弱気が反映している。探究犬が「歩きたくても歩けない」と言うのに、相手の犬のほうが「だいじょうぶですよ（……）歩けます」と断言するのはいかにも奇妙であるが、これは気弱なカフカに対するミレナの強い励ましを表現しているだろう。

上に引用した6月3日の手紙に、「励まし」という言葉が見られる。

でもこの狩りにおける励ましは、私を励ましはしません。逆です。励まされると私はもう一歩も動けなくなります。突然すべてが嘘になり、追われているものたちが狩人を絞め殺しかねません。ミレナさん、私はそんな危険な道にいます。（1920年6月3日付、Mi 41）

ここでの「狩り」は、恋愛関係に入ることを意味している。「狩人」も「追われているものたち」も恋愛におけるカフカの内面の衝動を表現するものであり、恋愛の相手を狩り立てることではない。「追われているものたちが狩人を絞め殺す」というのは、あまり性急に恋愛に突き進むと、内面のベクトルが突然逆の方向を向き、精神的な破綻に至ることもありうるという意味である。ミレナが怖じ気づかないようにとカフカを「励まし」てきたのに対して、それが逆の効果をもたらすと訴えているのである。

頑固にその場に居続ける探究犬に対して見知らぬ犬は、今のうちならゆっくりと立ち去ることができるが、後になると走らなければならなくなると警告する。もうすぐ狩りが始まり、そうするとどんなに弱つていようと助かるためには走って逃げるしかなくなるという意味である。それでも探究犬は、そんなことは自分の問題だ、放っておいてくれと突っぱねる。すると相手の犬は、「それは私の心配でもあるのです」と「悲しみながら」言う。

それまでの静いように見える両者のやりとりからは、この犬の言葉と態度は非常に唐突な印象を受けるが、この唐突さは、カフカがミレナとの関係の推移を短い行数に凝縮して表現しているところから生じている。意固地な探究犬に対する「励まし」に続く、この情のこもった言葉と態度は、ミレナがカフカに示した愛情を表していよう。実際、二人の関係においては、ミレナの方が最初にカフカに愛を示唆しているのである⁹⁾。

3. 「愛を交わそうとして」——身体的接近

そして今はどうやら私を、つまり一時的にここにそっとしておこうと思っていたのだが、その機会を利用して、私と愛を交わそうとして近づこうとした。別のときだったら、私はその美しい犬が身を寄せてくるのを喜んで我慢しただろう。当時はしかし、私には何のこ

とかわからず、それに対して恐怖を感じた。「近寄らないでくれ」と私は叫んだ。そうしないと自分の身を守ることができなかつただけに、それだけいっそう大きな声で。「わかりました」と犬は、ゆっくり後ろに下がりながら言った。「あなたは変な人ですね。私が気に入らないのですか。」「あなたが立ち去り、私をそっとしておいてくださるなら、あなたが好きになります」と私は言った。しかし私には確信がなかった、どのようにしてその犬に信じてもらおうとしているのか。

探究犬にやさしさを示した美しい犬は、続いて「愛を交わそうとして (liebend)」近づいてくる。ビンダーは、この語に注を付し、「カフカとミレナの関係の主導権は、エロチックな点においてもまた、ミレナの側にあった」¹⁰⁾と述べている。ビンダーもはっきりとこの語を性的な意味で捉えていることがわかる。つまりここで表現されているのは、最初の情愛が身体的接近へと移行しようとしたということである。この移行もまたあまりにも急に思われるが、やはり現実に関わったことを短縮して寓話化しているからである。そして、カフカにとって本当に問題となるのはここから先だからでもある。

相手の犬の身体的接近に対して、探究犬は「恐怖」を感じ、「近寄らないでくれ」と叫ぶ。伝記的事実の中にこれと照応するものを探るなら、ミレナから彼女のいるウィーンに来ないかと誘われたときのカフカの激しい動揺がそれに当たるだろう。

私は行くつもりはありません (ミレナさん、助けて下さい！ 私が語る以上のことをわかってください！) 私は行くつもりはありません (どもっているんじゃない) ウィーンへは行きません。なぜなら、私の精神が緊張に耐えられないと思うからです。私は精神を病んでいます。(1920年5月31日付, Mi 29)

愛を確認した者同士がただ会うだけなのに、ここには過剰とも言える拒絶反応が示されている。この拒絶反応の根底にあるのは、カフカが以前からかかえている性行為に対する不安と恐れである¹¹⁾。カフカはウィーンでミレナと会うことで手紙の上での愛がいずれ肉体関係へとつながっていくことを予感したに違いない。それがこの手紙に見られるような極端な反応となって現れていると思われる。「行くつもりはありません」という絶叫の繰り返しは、「恐怖」に襲われた人が「近寄らないくれ」と叫んでいるのと同じようなものである。

ウィーンには行けないというカフカの返事に対して、事情のわからないミレナは、自身が傷ついたことを伝えると同時に、便箋二枚にわたって延々と激しい怒りの「演説」(Mi 47)を行う。ミレナの怒りは物語中では表現されていないが、「あなたは変な人ですね。私が気に入らないのですか」という相手の犬の問いかけは、この間の事情に相応しているだろう。ミレナにとってカフカの反応はまったく不可解なものであり、拒絶の原因は自分の側に問題があるせいであると受け取っても不思議はない。ただ、このことをきっかけにして、両者の間で「不安」についての議論が交わされ、ミレナはその原因を理解するようになる。

探究犬の発言、「あなたが立ち去り、私をそっとしておいてくださるなら、あなたが好きになります」は、肉体的な距離を置いた関係を求めるカフカの気持ちを遠回しに表現している。しかし、そのような関係が本当に理解してもらえるかどうかについてはまったく確信がない。それが、「しかし私には確信がなかった、どのようにしてその犬に信じてもらおうとしているのか」

という言葉となっている。性行為のない結婚生活、——それはカフカが最初の婚約者フェリーツェ・パウアーとの関係において望んだものであった。もちろん、フェリーツェはそれをまったく理解できなかった。カフカは同じことをミレナにも求めようとしたのである。

探究犬の語りは次のように続く。

空腹によって鋭くなった感覚で、私は犬の何かを見、何かを聞いた。それは最初は始まりだった。それは大きくなり、近寄り、そして私にはわかった、この犬が明らかに私を追いやる力をもっているということが。私がどうやっていつか立ち上がることができるのか、今はまだわからないにしても。私は犬を見た。私のぞんざいな返答にただ穏やかに頭を振ったこの犬に対してますます欲求を強めながら。

探究犬は、相手の犬の「何かを見、何かを聞く。それが「歌」であることは後に明らかになる。「この犬が明らかに私を追いやる力をもっている」というのは、断食をやめさせる力を持っているということである。「この犬に対してますます欲求を強めながら」と、突然「欲求(Begierde)」という露骨な言葉が登場しているが、これはもちろん性的欲求を指している。断食をしていた犬が、美しい犬の「歌」を聞き、美しい犬に「欲求」を覚える。それは禁欲をしていたカフカがミレナに惹きつけられていき、禁欲生活を脱していったことを寓意化している。

4. 「狩りをしなければなりません」——性をめぐる議論

続く対話でようやく相手の犬が「狩人」であることがわかる。

「あなたは誰ですか」と私は尋ねた。「私は狩人です」と犬は言った。「それでどうしてあなたは私をここにそっとしておいてくれないのですか」と私は尋ねた。「あなたは私の邪魔をしているのです」と犬は言った。「あなたがここにいます、私は狩りができません。」「試してみてください」と私は言った、「ひょっとしたら、狩りができるかもしれませんよ。」「いいえ」と犬は言った、「申し訳ありませんが、立ち去ってもらわねばなりません。」「今日は狩りをやめにしてください」と私は頼んだ。「いいえ」と犬は言った、「私は狩りをしなければなりません。』

見知らぬ犬が探究犬に立ち退くように求める理由が、狩りをするためであることがはっきりする。そして、＜立ち退け、いや立ち退かない＞の言い合いが、＜狩りをしたい、狩りをやめられないのか＞の論争へと移行していく。

「狩り」をめぐる両者の奇妙な押し問答は何を意味しているのだろうか。それは端的に言うなら、性行為をめぐるカフカとミレナの議論である。「狩り」はここでは性行為のメタファーとなっている。

カフカとミレナの関係全体を見わたすとき、二人の間で最大の障害となったのは性行為に対する捉え方の違いである。カフカは性行為に対して激しい拒否感を抱いており、それは単なる信条的なものにとどまらず、もっと心の深い部分に根ざしたトラウマと言えるものだった。一

例として、ウィーンの森でミレナとの身体的接触があった一ヶ月後に書かれたカフカの手紙を見てみよう。

しかしまさにこの昼の世界と、君があるとき軽蔑的に男どもの事柄として手紙に書いてきたあの「ベッドの中の三十分」との間には、僕にとって越えることのできない深淵がある。越えられないのは、たぶん僕がそれを望まないからだろう。向こう側には夜の事柄が、まったくもってあらゆる意味で夜の事柄。こちら側には世界があり、僕はそれを所有している。それなのに、もう一度世界を所有するために、夜に向かって跳ばなければならないという。何かをもう一度所有することができるのか。それはそれを失うことではないのか。ここに世界があり、それを僕は所有している。それなのに向こうに跳ばねばならない。不気味な魔術のために、ちちんぷいぷい、賢者の石、錬金術、魔法の指輪のために。そんなものはいない。僕はそれがとても恐ろしい。(1920年8月9日付, Mi 202)

「ベッドの中の三十分」とは性行為のことである。強調されているのは、それがミレナの言葉引用したものだからである。ミレナはカフカの不安を和らげるために、性行為を「男どもの事柄」と表現し、それは自分にとって重要な事柄ではないことを伝えようとした。それに応えてカフカは、昼の世界と夜の世界との間には「僕にとって越えることのできない深淵がある」と打ち明け、続けて、自分たちはもうすでに一つなのに、この上なぜ性行為が必要なのかと、自問の形でミレナに問いかけている。性行為を、「不気味な魔術」、「ちちんぷいぷい、賢者の石、錬金術、魔法の指輪」と言い換え、「そんなものはいない」と言い、「それがとても恐ろしい」と告白している。

一方、ミレナの方は性行為に対する特別の抵抗感を持っていなかった。それはたとえば、カフカとの別れが決定的になったときに、彼女がカフカの友人マックス・ブローツに宛てて書いた手紙からもわかる。ミレナはそこで、カフカとの生活に踏み切れなかった理由として、「ひょっとしたら私がいかに女でありすぎたために、生涯にわたるきわめて厳しい禁欲を意味するだろうとわかっている生活を受け入れる力がなかったのかもしれません」(Mi 371)と述べており、それほど親しいわけでもないブローツにさえ、自身の性的な欲求について悪びれずに語っているのである。

また、カフカとミレナの共通の友人であり、後になって『ミレナへの手紙』を編集したヴィリー・ハースも、カフカの手紙に見られる性行為を否定的なものとする考え方は、「たとえミレナが、彼(＝カフカ)のためにこれらの事柄(＝性行為)を軽蔑的に語ったことがあったとしても、彼女が一人の男性を情熱的に愛しているときには、きっと非常に縁遠い考え方だっただろう」¹²⁾と述べている。

さらに、ブーバー＝ノイマンのミレナ評を見てみよう。

カフカが見てとったように、彼女は、ミレナは、愛の人だった。彼女にとって愛は、ただ一つ、本当に偉大な生を意味したのである。彼女の感情の強さは、心も体も精神もすべて愛に捧げ尽くす力を彼女に与えた。彼女はもの怖じせず、激しく感じることを恥辱とは思わなかった。愛は彼女にとって、何か明瞭なもの、自明なものだった。¹³⁾

「心も体も精神もすべて愛に捧げ尽くす」とあるように、ミレナにとって精神的な結びつきと肉体的な結びつきは一体のものであり、愛が性行為に結びつくことは当然のことだったのである。ミレナはブーバー＝ノイマンに、「愛してみないとその人については何もわからないわ」¹⁴⁾と語っているが、ここでの「愛する」は性的な意味も含んでいるだろう。

すべてを与える恋人としてのミレナはまた、相手からすべてを求める女性でもあった。そしてそれは性的な面でも同様であり、カフカに対する場合も例外ではなかったことが、同じくブーバー＝ノイマンの証言からわかる。

重病であった彼（＝カフカ）は、生命力に溢れるミレナのもとで悩んだ。彼女は彼のすべてを、肉体的な愛もまた要求し、彼はそれを恐れて退いたのだ。¹⁵⁾

『探究』に戻れば、「狩り」は性行為を、そして「狩り」をめぐるやり取りは、性行為をめぐるカフカとミレナの綱引きを表している。自分を「狩人」であるといい、あくまで狩り続けることに固執する美しい犬は、恋愛において相手からすべてを求める激しさを持つミレナである。それに対して、自分がその場においても「ひょっとしたら狩りができるかもしれませんよ」と言ってみたり、「今日は狩りをやめにしてください」と要求してみたりする探究犬は、性行為をなんとか回避し、自分のこれまでの禁欲的な生き方——それは同時に「書くこと」に没頭する生活である——をなんとか続けていけないものかとあれこれ弁を弄するカフカである。

1920年7月8日のミレナ宛の手紙でカフカは、「そして僕たちが一つであるとしても（……）それは別の領域でのことだ。彼（＝エルンスト・ポラック）の領域においてはではない」（Mi 98-9）と述べ、自由恋愛を標榜し、派手な女性関係を続けているミレナの夫エルンスト・ポラックの得意分野である性の領域における一体化と、自分とミレナの精神的領域における一体化を明確に区分しようとしている。また、8月13日の手紙では、「君は晩と朝を共にする者たちと、共にしない者たちについて書いている。後者の状態がまさに僕により好都合に思われる」（Mi 216）と、やはり性を排除した関係に固執している。カフカは、ミレナがポラックの妻のままでも自分たち二人の関係は可能であると考えることがあったのかもしれない。そしてそれが、「（自分がこの場においても）ひょっとしたら狩りができるかもしれませんよ」という表現となっているのかもしれない。いずれにせよ、カフカの手紙はミレナに対して自分は性行為を望まないと訴えているも同然であり、物語における「今日は狩りをやめにしてください」という要請とつながるものである。

カフカはミレナに性行為の回避をなんとか受け入れてもらえないかと何度も訴えるが、彼女はきっぱりと拒絶する、「私は狩りをしなければなりません」と。

5. 「この自明なこと」——議論の打ち切り

カフカとミレナの性をめぐるすれ違いはどうなっていくのだろうか。

「私は立ち去らねばならない、あなたは狩りをしなければなりません」と私は言った、「しなければなりませんばかりです。どうして私たちがしなければなりませんのか、あなたはわかっているのですか。」「いいえ」と犬は言った、「でもそこにはわかる必要のあることは何もあ

りません。それは自明で、自然な事柄です。」「いや、そんなことはありません」と私は言った、「あなたは私を追いやらねばならないことを申し訳なく思っています。それなのにそうなさるのです。」「そうです」と犬は言った。」「そうです」と私は腹を立てて繰り返した、「そうですは答えではありません。どちらがより簡単ですか、狩りをやめることですか、それとも私を追い払うのをやめることですか。」「狩りをやめることです」と犬は躊躇せず言った。」「ほら」と私は言った、「ここには矛盾があるじゃないですか。」「いったいどんな矛盾ですか」と犬は言った、「親愛なる小さな犬さん、あなたは本当に私がしなければならぬということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか。」

実に不可解な対話であるが、ここで行われているのは愛と性をめぐる議論である。

ミレナは「狩りをしなければならぬ」と言う。つまり、恋愛関係にある男女が性行為に及ぶことは当然であると主張する。ミレナ的主張に対してカフカは、なぜ性行為が不可欠なのかわかっているのか、そのことを論理的に納得しているのかと問う。するとミレナはあっさりと、「でもそこにはわかる必要のあることは何もありません。それは自明で、自然な事柄です」と答える。ミレナにとっては愛し合う男女が性行為に及ぶことは「自明で、自然な事柄」なのである。

ミレナの発言に納得できないカフカはさらに食い下がる。「あなたは私を追いやらねばならぬことを申し訳なく思っています。それなのにそうなさるのです。」申し訳ないという気持ちは、本来相手を尊重したいのにそれができないことから生まれる気持ちである。相手を尊重するという意味で、ここでは愛と関わっていると考えられる。申し訳なく思っているのに狩りのために追い払うというのは、日常語に翻訳するなら、愛があるのにそれよりも性を優先させるということである。カフカはそうミレナを追及しているのである。

狩人犬の「そうです」というあっさりした返事は、愛も存在するが性への欲求もまた存在することを認める発言である。愛と性の併存を何ら矛盾とは思っていないミレナに、業を煮やしたカフカは窮極の選択を迫る、「どちらがより簡単ですか、狩りをやめることですか、それとも私を追い払うのをやめることですか」と。これは奇妙な二者択一である。狩りをやめれば、必然的に探究犬を追い払うことをやめることになるのであるから、二者択一などではなく、同じ内容の二つの問いの間での選択であるように見える。しかしここには微妙な差異がある。前者は性行為を断念することを意味するにすぎないのに対して、後者は探究犬を尊重することを意味している。つまり後者は、探究犬のことを尊重した結果、狩りをやめるということである。どちらも狩りをやめること、つまり性行為を断念することにつながり、結果としては同じなのだが、最初の動機が異なっている。つまり、性を優先するのか、愛を優先するのかということである。

狩人犬はためらうことなく、「狩りをやめることです」と答える。それに対して探究犬は「矛盾」とあると言う。これもわかりにくい発言である。いったいどんな矛盾があるのか。狩人犬は、一方で「狩りをしなければならぬ」と言っているが、他方で探究犬を追い払うことを「申し訳なく思っ」ている。探究犬はこの両者のうちどちらがより本質的なものなのかを確かめようとしたのである。そのさい、「<狩りをする＝性>と<気の毒に思う気持ち＝愛>のどちらが優勢なのか」と単純に問わずに、「<狩りをやめる>と<追い払うのをやめる>のどちらがより簡単か」というまわりくどい問い方をしている。返ってきた答えは<狩りをやめ

ること>であった。ということはつまり、追い払うことを申し訳なく思っているという気持ちの方がより本質的なものであるということになる。それゆえ、その気持ちに従って狩りをやめるという結論に至るのが矛盾のない論理となる。

カフカはつまり、愛を優先させる（気の毒に思う）のであれば、性行為（「狩りをしなければならない」）は必要ないのではないか。ミレナは根拠もなく（「どうして私たちがしなければならないのか、あなたはわかっているのですか」）、性行為（「狩りをしなければならない」）を当然のこととして認めてしまっているのではないかと問うているのである。

二人の議論はなぜすれ違ふのだろうか。それは愛と性の間に絶対的な断絶を見るカフカと、愛と性は融合しており、それは互いに分離することなど決してできないものであると考えるミレナの、性愛に対する捉え方のずれのゆえである。

相手の論理矛盾をはっきりつかまえたことを誇るかのように、カフカは、「ここには矛盾があるじゃないですか」と言う。それに対して、性愛に関してまったく異なる考えを持つミレナは、「いったいどんな矛盾ですか」と問い返し、さらに、「あなたは本当に私がしなければならないということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか」と言う。愛に性が伴うことは、ミレナにとってはまったく「自明なこと」なのであり、ミレナはこの立場から逆にカフカに「この自明なことがわからないのですか」と問いを投げ返すのである。¹⁶⁾

6. 「あなたは歌を歌うのですね」——愛の旋律

狩人犬の問い返しの後、探究犬は相手の犬が歌を歌い始めていることに気づく。

私はもはや何も答えなかった。というのも私は気づいたからだ。——そしてそのとき、新しい生命力が私を貫いた。恐怖がもたらすような生命力が。——私は、ひょっとしたら私以外の誰も気づくことができなかった、とらえがたいさやかな事柄を通じて、その犬が胸の奥から一つの歌を歌い始めていることに気づいた。「あなたは歌を歌うのですね」と私は言った。「ええ」と犬はまじめに言った、「歌を歌います。すぐに。でもまだ歌ってはいません。」「もう始めていますよ」と私は言った。「いいえ」と犬は言った、「まだです。でも用意をしてください。」「あなたが否定しようと、もう聞こえていますよ」と私はふるえながら言った。犬は黙った。

探究犬は狩人犬が歌う歌を聞き取り、戦慄とともに「新しい生命力」が身内を貫くのを感じる。読者に不思議な感動を呼び起こすシーンである。なぜここで歌が聞こえてくるのだろうか。歌はどのような意味を持っているのだろうか¹⁷⁾。そして、探究犬には歌が聞こえているのに相手の犬はまだ歌っていないというこの奇妙なずれは何なのだろうか。

私は当時、これまで私以前にいかなる犬も経験したことのない何かを認識したと思った。少なくとも、伝承にはそのかすかなほのめかしさえ見られない。そして私は急いで果てしない不安と恥ずかしさの中で、血だまりの中に顔を伏せた。私が認識したと思ったのはつまり、その犬が気づかないうちにもう歌っているということ、いやそればかりか、犬を離れた旋律が、それ自身の法則に従って、空中に浮かび、犬の上方を離れ、その犬とはまる

で関係ないものであるかのように、私の方を、ただ私の方をめざしているということであった。

狩人犬から出た旋律が、独立した物質のように探究犬の方に向かってくる。それは探究犬だけに向けられたものである。この旋律、——それは一言で言うなら、ミレナのカフカへの愛である。

すでに「私は犬の何かを見、何かを聞いた」とあったように、歌の予感があった。それは美しい犬が最初に好意を示してきたときのことだった。そして今ここで歌がはっきりと聞こえてくる。なぜだろうか。それは狩りをやめることと自分を追い払うことのどちらがより簡単であるかという探究犬の問いに対して、狩人犬が「狩りをやめることです」と「躊躇せず」言ったからである。狩人犬の言葉と調子は、たとえ狩りという自分の本来の仕事を中断しても相手のことを尊重することをきっぱりと宣言するものであり、これは強い愛の告白であると言える。だが探究犬は、「ここには矛盾があるじゃないですか」と相手の論理的矛盾を発見したことを得意がるばかりである。言葉のやりとりを字義通りに受け取り、その論理性を云々するするばかりで、相手の言葉の背後にあるものを感じていない。そこで狩人犬は、「いったいどんな矛盾ですか」と尋ね返し、「あなたは本当に私がしなければならないということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか」と言う。狩人犬がどのような口調で、またどのような表情でこの言葉を発したかを伝える描写はここにはない。しかし狩人犬の言葉には、形式的な論理に拘泥し続ける探究犬に対する怒りの感情ばかりでなく、自分の気持ちが伝わらないことへのもどかしい思いや理解されないことに対する悲しみも混じっていたと想像してもおそらく間違っていないだろう。

言葉の背後には目に見えないもの、聞こえないものがあるということ、——探究犬はそのことに気づかないのであろうか。そうではない。狩人犬の「この自明なことがわからないのですか」という言葉とともに、探究犬は黙る。それは相手の犬が歌を歌っていることに気づいたからである。そしてこの歌こそ、狩人犬の言葉の背後にあったもの、つまり探究犬への愛なのである。それを感じた探究犬は、「果てしない不安と恥ずかしさ」を感じて顔を伏せる。ここに描かれているのは、カフカがミレナからの愛を感じとった瞬間なのである。

狩人犬が、自分は歌を歌うがまだ歌っていないと言うのに、探究犬のほうはすでに歌を聞いている。このずれは、愛と性に関するカフカとミレナの認識のずれを寓意的に表現したものであると考えられる。カフカは性行為に先んじて愛を感じとり、それをもっとも大事なものであるとみなす。一方、愛と性の一致を当然と考えるミレナは、「まだです。でも用意をしてください」と言うのである。

7. 「今日では私は」——それから何が

歌が空中を漂い、探究犬の方にやって来る。それからどうなったのか。探究犬は空中を漂ってくる旋律に「抵抗」できず、セイレーンの歌にとらえられてしまった舟人たちのように¹⁸⁾、完全に呑み込まれてしまう。

今日では私はもちろん、そのような認識はすべて否定するし、それは当時私が過敏だった

ためだと思っているが、それが迷妄であったとしても、その迷妄には何かすばらしいものがある。それは、私がこの世界における断食時代から救い出した唯一の現実である。たとえ見せかけのものであるにせよ。それは少なくとも、完全な忘我において我々がどれほどのものに到達することができるかを示している。そして私は完全に我を忘れていた。通常の状況の下では、私は重病だったし、動くことができなかったろう。しかし、今すぐにもその犬が自分のものとして引き受けるように思われた旋律に、私は抵抗できなかった。

語り手はここで、これまでのような出来事の時系列的な報告を突然中断し、「今日では」と現在の立場と視点からのコメントを挿入している。そして、空中を漂ってくる旋律は、断食当時の神経過敏のためであるとして「すべて否定」され、「迷妄」や「見せかけのもの」とされる。しかし、それでもそこには「何かすばらしいものがある」と肯定されてもいる。それは「忘我 (Außer-sich-sein)」の体験に大きな意義があることを知ったからである。

「忘我」という言葉は、カフカがミレナ宛の手紙で、「森の獣」である自分がミレナと出会ったとき、「僕はすべてを忘れた。完全に我を忘れた (ich vergaß alles, vergaß mich ganz und gar)」(Mi 262)と書いていたことを想起させるが、「忘我」に相当する具体的体験をカフカの伝記的事実から取り出すなら、それはウィーンの森でのミレナとの身体的接触であろう。彼女とともに草地に横になったときのことを、カフカは一ヶ月後の手紙で次のように書いている。

僕は君を愛しているので (.....), 世界全体を愛しており、そして世界には君の左肩もあるので、いや、それは最初は右肩だったから、そこにキスをする、そうしなくなったときに (そして君は親切にも、ブラウスを引き下げてくれた), そして世界には左肩もあり、森の中での僕の上にある君の顔と、森の中での僕の下にある君の顔もあり、そしてほとんどむき出しになった君の胸での安らいもある。そしてそれゆえ、僕たちがもう一つだったと君が言うとき、それは正しい。ぼくは一つであることにまったく不安を抱いていない。それは僕の唯一の幸福であり、僕の唯一の誇りだ。(1920年8月9日付, Mi 202)

カフカがどんなに幸せを感じたかが文面から伝わってくる。肉体的な意味での一体化は生じなかったが、カフカにとっては「もう一つだった」のであり、性行為に匹敵する忘我の体験だったのである。

狩人犬の歌を聞いた後の探究犬の「忘我」もまた、性行為そのものではないが、性行為へとつながっていくものである。カフカの描写を見てみよう。

それ(＝旋律)はどんどん強まってきた。それはとどまるところを知らず、もう今はほとんど私の耳を破裂させんばかりであった。しかし最悪なことは、それがただ私のために存在しているように思われることだった。この声、その気高さの前では森も沈黙したこの声が、ただ私のためだけに。相変わらずここにとどまることをあえてし、汚れと血の中でいばってその音楽を聞いている私とは誰なのか。よろよろと私は立ち上がり、自分の体を見下ろした。「とても走れないな」と私はなおも思っていた。しかしすでに私は旋律に駆り立てられて、なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走っていた。

狩人犬の歌声が強まり、探究犬の意識を圧倒してしまう。「最悪なことは」と言われているのは、個体としての醒めた意識にとってという意味であろう。個体としての意識から解放された探究犬は、「忘我」の中で、「旋律に駆り立てられて (von der Melodie gejagt)、なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走って」いるのである。ここにも jagen (狩りをする) という言葉が登場しているが、「狩り」が性愛を譬える言葉であることはすでに述べたとおりである。

狩人犬の歌声を聞いたとき、探究犬は「新しい生命力が私を貫いた」と感じる。そして今、旋律が探究犬に走る力を与える。大地からの食物ではなく、音楽という空中からの糧が、衰弱し、死にかけていた探究犬をよみがえらせたのである。ここにおいて、この旋律が「未知の糧」であることはもう明らかであろう。それは大地が与える糧のように目に見えるものではない。しかし、生きる上では大地が与える食物よりももっと本質的なものである。伝記的に見れば、それはミレナの愛なのである。カフカが彼女の「生命を与える力」を称えているという事実も¹⁹⁾、このことを裏づけるだろう。

8. 「何も話さなかった」——戻ってきて

狩人犬のところから戻った探究犬のその後は、次のように述べられている。

私の友人たちには何も話さなかった。戻った直後ならすべてを語ることもできたかもしれないが、そのときはあまりにも体が弱っていた。後になると、もう二度と伝えられないように思われた。ほめかすようなことを言わないようにしようとする必要もなく、人と話すときでもそのようなことはあとかたもなく消えてしまっていた。ついでながら、体のほうは数時間で回復したが、精神的には今日でもなおその影響が残っている。

ウィーンでミレナと幸せな四日間を過ごしたカフカは、ブラハに戻るとすぐ友人のブロートと会っている。そのときのカフカのようすについて、ブロートは驚きをもって報告している。

彼(＝カフカ)が1920年の前半に、療養を終えてメラーンからブラハに戻ってきたとき、私にはそれが彼だとはとても思えないほどだった。ふだんはあんなにも物静かなのに、とても幸せそうに、そしてすさまじい勢いで、ミレナと過ごしたウィーンでの日々のことを語ったのだ。²⁰⁾

ほとんど有頂天といってもいいカフカの姿が彷彿とする。ブロートに「すさまじい勢いで」ウィーンでの日々のことを語ったとされていることは、「友人たちには何も話さなかった」という物語の記述と矛盾しているように見えるが、ミレナとの関係の本質的な部分については話さなかったという意味に解することができよう。

むすび

以上、『探究』の末尾に登場する美しい犬をミレナであると仮定し、探究犬とその犬の対話を

カフカとミレナの伝記的事実と照合しつつ読み解いてきた。これによって不可解に見える両者の対話の意味するところが明確になったと言えよう。

探究犬と狩人犬の出会い、カフカとミレナの恋愛関係を凝縮し、その本質を寓話的に表現したものなのである。この物語の背景となっているのは、人間的な交際から遠ざかり禁欲的な生活を送っていたカフカが、ミレナとの逢瀬によって愛の歌を聞き、それが糧となって生きる力を再び獲得したという伝記的事実である。

カフカはミレナから長い間憧れ求めていた「未知の糧」を受け取った。だが、「未知の糧」とは一人の女性から与えられる愛情という個人的なものにすぎず、カフカはただそれだけを求めて延々と苦しみ続け、長年にわたって文章を書き続けてきたのだろうか。「未知の糧」はカフカの文学的営為全体とどのような関連にあるのだろうか。

それを明らかにするには、カフカの最後の作品、『歌姫ヨゼフィーネあるいはねずみ族』を見なければならぬ。なぜならそこでは「未知の糧」が芸術と結びつけられ、それによってカフカのこれまでの人生の集大成が行われているからである。

注

1) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M.: Fischer 1994, S. 185.

2) Binder, Hartmut: *Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München: Winkler 1977, S. 293.

3) 『ある犬の探究』からの引用は、Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M.: Fischer 1992 による。歌う犬が登場するのは S. 475-480 である。この部分は全て訳出するので、特に頁数を示すことはしない。

4) 原文のドイツ語では「犬」は Hund (牡犬) となっており、Hündin (牝犬) とはなっていない。また Hund は男性名詞なので、常に er (彼) で受けられている。しかし、これはミレナが特定されるのを避けるためのカモフラージュであろう。このことを考慮し、本稿では原文で er とされている箇所はすべて「犬」と普通名詞で訳している。

5) Kafka, Franz: *Briefe an Milena*. Hrsg. v. Jürgen Born u. Michael Müller, Frankfurt a. M.: Fischer 2011 (初版は 1983). 以下、本書からの引用は、本文中においても注においても、Mi と略記して頁数とともに示す。

6) 1920 年 8 月 26 日付のミレナ宛の手紙でカフカは、「僕は汚れている、はてしなく汚れている」(Mi 228) と書いている。また、1920 年 7 月 5 日付の手紙でミレナを「天使」(Mi 86) とみなしている。

7) Buber-Neumann, Margarete: *Milena. Kafkas Freundin*. 4. Aufl., München: Langen Müller 2000, S. 86. なお、Binder, *Kafka-Kommentar*, a. a. O., S. 293 も参照のこと。

8) Binder, *Kafka-Kommentar*, a. a. O., S. 293.

9) Binder, Hartmut: *Kafkas Wien*, Prag: Vitalis 2013, S. 339f.

10) Binder, *Kafka-Kommentar*, a. a. O., S. 294.

11) これについては拙論「カフカとミレナの関わり—ウィーンの森とグミュントで起こったこと—」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第 36 巻, 第 2 号, 2014 年, 119~133 頁) 参照。ビンダーも探究犬の「恐怖」を「性的結合に対するカフカの不安」(Binder, *Kafka-Kommentar*, a. a. O., S. 294) と解している。

12) Kafka, Franz: *Briefe an Milena*. Hrsg. v. Willy Haas, Frankfurt a. M.: Fischer 1975, S. 279.

- 13) Buber-Neumann, a. a. O., S. 98.
 14) Buber-Neumann, a. a. O., S. 99.
 15) Buber-Neumann, a. a. O., S. 109.
 16) すぐ上の引用で見たように、ブーバー＝ノイマンもまた、ミレナの愛について語るさいに「自明な (selbstverständlich)」という言葉を使っている。この言葉を使いたくなるようなものがミレナの言動から感じられるのだろう。
 17) ビンダーは一方ではこの歌をカフカのミレナ体験の充溢感と関連づけるが、他方ではヘブライ語とも結びつけている。それはビンダーが『探究』をユダヤ民族の運命を描いたものであると捉えるからである。Binder, *Kafka-Kommentar*, a. a. O., S. 295-6.
 18) カフカの遺稿に『セイレーンの沈黙』という小篇があるが、この物語もカフカの禁欲的姿勢との関連で捉えることができるだろう。
 19) 1920年7月12日、カフカはミレナに、「これはまたもや生命を与える君の力なんだ、母なるミレナ」(Mi104)と書いている。
 20) Brod, Max: *Über Franz Kafka*. Frankfurt a. M.: Fischer 1980, S. 195.

Kafkas *Forschungen eines Hundes*

— der singende Hund und Milena —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

In der vorliegenden Arbeit soll die Bedeutung eines Dialogs am Ende von Franz Kafkas fragmentarisch gebliebener Fabel *Forschungen eines Hundes* von 1922 geklärt werden.

Gesprächspartner sind zwei Hunde: der Forscher-Hund, der als Erzähler der Geschichte fungiert, und ein schönes Tier, das sich als Jäger ausgibt; Ersterer steht für Kafka, das andere Tier für Kafkas Freundin Milena Jesenská. Das Gespräch ist eine Metapher auf ihre prekäre Liebesbeziehung und dreht sich inhaltlich um das Liebesgefühl und die Sexualität. Letztere wird von Kafka sehr negativ bewertet, während für Milena beides unauflöslich zusammengehört. Inmitten des Disputs hört der Forscher-Hund ein durch die Lüfte schwebendes Lied, durch das er sich angesprochen fühlt. Dieses Lied symbolisiert die Liebe Milenas zu Kafka.

【Key words】 Musik, Milena, unbekannte Nahrung, Jagd